福井県立恐竜博物館紀要 4：63–71（2005）
© by the Fukui Prefectural Dinosaur Museum

日本での博物館事情と21世紀への展望

濱田隆士

（財）日本科学協会理事長，福井県立恐竜博物館館長，東京大学名誉教授

要　旨

2004年は国際博物館年に当たり，来る10月には韓国に於いて大会が開かれる．テーマは“無形文化財と博物館”である．今年のキャッチフレーズは“Museum Friends”であり，MFJ（M.F.Japan）はその前年に会議を開いている．

わが国の博物館（動・植物，水族館を含む）は西洋からの輸入文化とされ，追い付け追い越せムードが続いていたが，第二次世界大戦後次第に世の中がグローバル化されるに伴い，バリアフリー志向からユニバーサル思考へと急速な変化を遂げてきた．現在6,000館もの博物館があるといわれるが，うち3,000館程度が登録博物館である．博物館の原点は言うまでもなく，万国博にあり，恐竜を模した水晶宮（Crystal Palace）は今もロンドン市内にある．

日本国内では，現在愛知県で着々と万国博「愛・地球博」工事が進められているが，目玉としては何といっても，シベリアから掘り出され運ばれてくる予定の“冷凍マンモス”である．なお，幕張メッセ（千葉）では中国からの巨大恐竜を搬入するイベントも計画されている．これらは，いずれも「博物館活動」の一環であることは言うまでもない．

わが国の博物館は，本来野外展示を伴うものであったが，現今では，単なる展示に留まらず，ハンズオン手法を取り入れた五感体験型の参加者が増えつつあり，考古・歴史～古生物関連の発掘作業も盛んである．

社会事情としては政府主導の“改革特別区域”（特区）が注目されており，教育関係も含まれるが，いずれは官設・民営からさらに企業体主導に移行することになろう．地域特性の発揮，地域への情報開示，さまざまな規制緩和が主目的であり，やがては博物館関連にも広がろうとしている．

現行の日本の“博物館”は大きく３つの社会的階層に分かれている．すなわち，国立レベル，県立をはじめとする地方公共自治体レベル，企業や私立レベルである．全体として国公立は大学を含めて独立行政法人化の流れの中にあり，今後21世紀に向けては私立レベルに見習った“一般”博物館型に発展することが期待されている．

キーワード：近年の容れ物の無い博物館，日本の博物館，先進国の博物館，体感型

今年は，御承知の通り国際博物館年に当たり，来る10月には韓国に於いてその年次大会が開かれることになっています．この北京での中国博物館大会はその前哨戦と位置づけられるので，これを機会に私から皆様へメッセージをお届けできることは誠に光栄に存じます．

国際博物館年の今年のキャッチフレーズは，Museum Friendsであり，わが国ではこれに１年先行して，2003年にMFJ ― つまりMuseum Friends，Japan ― を立ち上げることとなった点を先ずご報告申し上げます．

Fukui Prefectural Dinosaur Museum, Terao, Muroko, Katsuyama, Fukui 911-8601, Japan. E-mail: t-hamada*dinosaur.pref.fukui.jp;
(*を半角@に変えてご入力ください)
The University of the Air, Chiba, Japan; The Nippon Foundation Bldg. 5F 1-2-2 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan.

世界の博物館界を見渡しますと，その発祥はヨーロッパにあり，ロンドンにおける第一回万国博（1851）で恐竜を模した大規模な「水晶宮」（Crystal Palace）が，未だに記念として残されております．

紆余曲折はありましたものの，第二次世界大戦後の博物学の近代化には目を見張るものがあります．定義にもよるでしょうが，アジア（インド－中国）では，むしろ宗教や漢方に深く根差した文化だったと言えるのかもしれません．西欧化を近代化と解するならば，今日に至って，ようやくハイレベルのミュージアム構想に達した，としてよいのかもしれません．

わが日本国にあっても，博物館のルーツを辿ってみますと，明治の開化期にようやく“輸入文化”として大学制度や博物館制度が置かれるようになりました．戦後の“復興”や“経済の再建”には著しいものがあり，西洋文化を見習

い，多くのお雇い外国人を招いたり外国への留学生を送り出すことによって，いわば「追いつけ・追い越せムード」を高めるべく努力が払われたのです．

詳しく立ち入ることは省略しますが，近年のバリアフリー志向からユニバーサル思考への急速な変貌には驚かされます．現在，6,000余館もの博物館やその類似施設があるとされますが，日本博物館協会への登録数は，およそその半分に留まっており，今後の更なる発展が期待されるところです．

さて，日本の博物館等 ― 動・植物園，水族館，科学館etc．の他，各地の国立・国定の公園等地方自治体レベルまでの自然・景観保護区，名所・旧蹟，あるいは神社・仏閣・庭園等の幅広い自然・文化遺産 ― についてざっと一望しておきましょう．そして，それらと海外，特に中国等との特色の違いをそれなりに正しく認識していただければ幸いです．

わが日本国は，その国土の四周を海に囲まれ，気候帯としては亜寒帯から熱帯域まで南北2,000kmに亘る列島が形成されています．海では南からの暖流系，「Kuroshio」が，そして北からは寒流系の「Oyashio」が岸を洗っています．それを基本にした植生，地帯構造も中々複雑で，至るところに名勝，奇勝があり，文化的にも多くの歴史的建造物や各種無形文化財までもが含まれています．幅広い分野での公開・展示は，まさに箱庭的～博物館的であるため，ありとあらゆる文化的公益施設を有し，人工密度の高さと文化程度の広がりには，高い相関があるとされます．

中国との比較は，歴史の古さや民族の多様性という面では比べ物になりませんが，国土の広大さと長大な河川のもたらした自然，文化としての財産は，例えば，この北京にある農業博物館でのように“特異性”を強調できる母体を持っていることで注目されます．

日本では，むしろ山岳森林域と水域との相互作用に目を向けた海辺（渚），河川，湖沼に深く関連した文化的諸施設が豊富であり，国情と共にグローバルに眺めたときの地勢をよく反映していると言えるでしょう．

もう一つ，わが国での大きな特色として，各種企業・組合・個人ベースの，公共性の高い博物館やその相当施設が多いことも挙げられるべきでしょう．国公立と違って全て独立採算制をとっているわけですが，近年とくに著しいのは，街角博物館をはじめとする食べ物屋敷博物館類，あるいは建物を持たない ― つまり箱物の要らない ― 砂浜博物館とか河口域博物館といった非常に“小規模”かつ“総合的”な「自称博物館」等も次々に誕生しているのです．

ただ，あまりにも博物館類や名所・旧蹟が多く，それらの情報がなかなか伝わりにくく，観光パンフレットで，あるいは新聞の折り込み広告や鉄道等の駅での極めて限定された範囲にしか徹底していないのが残念です．その点，空港や港湾等の待合室で見かける外国での公園・博物館ガイドパンフレット等は全く羨ましい限りです．日本を訪れる外国の方々の場合，これに加えて言葉の障害も当然存在するので，日本人としては大変心苦しい思いに駆られます．

近頃，日本の博物館施設にも，ようやく入館者数の増加が認められるようになったことは，車社会の反映なのでしょうが，ある意味で大いに勇気付けられることでもあります．例えば，日本海側の北陸各県では恐竜王国を名乗ったり，恐竜街道のキャンペーンが張られるなど，観光がらみであっても，いずれは物産にもつながることでしょうから，大切な動向であると理解できます．

一方，隣国である韓国や中国（台湾を含む）を見ますと，チルドレンズ・ミュージアム系が少ないことが明確で，今後，アメリカや日本と同じような増加傾向をたどるのでしょう．博物館というのは，言うまでもなく，研究・調査だけでなく，心のゆとりに根ざした“意識”の高揚と，地域住民－市民への“わかり易さ”を理解してもらうべきところだからです．その点では両国共，長い歴史に支えられて日本との関係も決して浅くはないのですから，例えば恐竜化石関係，あるいは考古・古人類学の分野でも，もっともっと大きく発展して欲しいところです．

ところで，いま少し日本での実情を報告させていただくことにしましょう．

日本について特筆に値するのは，何と言っても恐竜化石があっと言う間に，46都道府県のうち14の道県から知られるようになったことです．最初に岩手県から茂師（もし）竜という，*Mamenchisaurus*（馬門渓竜マメンチサウルス）と考えられる足の骨が海成層（礫岩）の中から見付かったのです．1978年のことでした．以来日本各地から恐竜化石が報じられ，いずれも大々的に扱われたうえ，そうした“宝物”を中心に恐竜博物館が次々に建設されていきました．

その最たるものとして，福井県では勝山市やその周辺から，計2,000個以上の恐竜骨の化石が見出され，現在の福井県立恐竜博物館に発展する基礎を造り上げたのです．これには，予備調査を含め，毎夏のように大学生や大学院生が参加し，合宿するなどして延べ３期にわたって10年以上の発掘作業となり，しかも恐竜を専門にしてみたいと考える人材までが育ったのです．

当初，日本では本当の恐竜学の専門家はいなかったため，俄かづくりの“恐竜研究者”が事に当たらざるを得ませんでした．もちろん，国外からの支援も多く，とりわけ中国の北京に在ります中国科学院の董枝明（Dong Zhiming）先生には大変お世話になりました．

福井県以外にも“手取統”あるいはそれに対比される中生代白亜紀前期の淡水成堆積物中には多種・多様の恐竜化石と共に，当時の古環境を示してくれる多くの随伴化石（貝類や餌となったことが考えられる植物のみならず多彩な生き物）が見出され，心強い限りです．恐竜骨格だけでなく歯・卵殻・足跡・皮膚痕等の他，鳥類，翼竜，昆虫類，魚類，亀・ワニなどの爬虫類，原始的哺乳類等，当時の環境の豊かさを支えていた生物群が検出されていますが，今は恐竜化石そのものの研究に忙しく，それらの随伴化石の研究は実はこれからというところです．

手取統は日本列島のほぼ中央に近い日本海側を中心に分布し，堆積物自体の調査から中国大陸を源とする河川が今の日本海がなかった頃陸続きの後背地となり，多くの河川堆積物がもたらされた，と推定されています．実態は明らかになっていませんが，中国でのように有毛恐竜や羽毛の生えた歯のある鳥類もきっといたに違いありません．

中国遼寧省の有毛恐竜～ドイツの始祖鳥時代に対比され

る原始鳥類化石層から発掘された化石は合計2,000体を超えるとかで，分類学上，これらをどう整理できるか，中国での成果が大きく待たれるところです．それは，恐竜類（爬虫類とされてきた）と鳥類とにだけ，硬殻卵を持つ，という不思議な共通性があり，未だにその解析が進んでいない事情があるからです．これからの国際的な研究体制の整備によって，大分類学が全面的に変わるのであろう事は言うまでもありません．

一方，日本国内にあっても恐竜類関連の様々な展示会・展覧会が数多く開かれていて，この点も恐竜人気がグローバルに広がっていることと決して無関係でなく，むしろ特筆にすべき問題だと思われます．前述の福井県立恐竜博物館でもその関連の中心的課題が常に取りあげられていて，これからは国際協力体制の下に，アジアの各地で大いに知的好奇心を高めることが望まれます．

さて，これから後は，日本国内の社会事情と博物館類との関係を，博物館活動という観点から眺めてみたいと思います．

ごく近年，わが国では社会的・経済的に改革ムードが高まってきており，中でも「構造改革特別区域」が2003年から始まっています．つまり「特区」と省略される事業域であり，非常に幅広い領域に亘って，「官設・民営」・「地方分権・規制緩和」・「民意による各種アイデアの創出」という３本の柱が立てられました．

2003年の第１回指定には1,000件を超える自治体からの提案が吟味され，230余件の「特区」申請が許可されました．経済特区や農業特区などもあり，ドブロク特区のようなものさえ登場する“雑多ぶり”が注目されています．中でも教育特区は，今の制度的教育カリキュラムを根底から見直そうというもので，これまでマイナーであった“不登校生”つまりLD（学習困難）などと呼ばれる人達の立場を克服すべく，文部科学省が大きく門戸を開放したのです．その趣旨は官設・民営といっても国の中央省庁からではなく，各自治体の自由裁量で助成し事を成し遂げるべきだとするのです．

問題は，民意というもの，今の制度教育に引きずられる危険性はまだ残っており，例えば現行の国公立教育委員会がそれぞれの自治体レベルでどこまでその権限を行使できるかとか，私立学校設置基準法にどうアプローチするとか，博物館関係はどうなる，といった課題が山積しており，これからがいよいよ本番といえるのでしょう．

博物館や博物館活動については，今の段階では必ずしも特区に結びつくものではありません．しかしながら，博物館は地域の小・中学校との連携活動をどのように推し進めたらよいのか，文部科学省でもいろいろ案を練っているところで，やがては，恒久的な活動として博物館友の会とか，ボランティアグループ型の“自由集団”が，コミュニティスクールとかミュージアムスクールにまで特区型展開を果たすことになるかもしれません．

最後になりますが，これまで指摘してきたような日本での博物館等やそれらをめぐる社会局面としての博物館型活動について，今後予想・予測される事態をまとめて記しておきたいと思います．

わが国は人口密度も高く，土地は狭く，資源も大いに不足しており，あまつさえ多種多様の環境問題を解決しなければならない立場に置かれています．こうした中，集中して広い土地を一つの博物館で占めることは望むべくもありません．そこで，ミュージアムパーク型にいくつかの博物館を1ヶ所に集めることにより，より緊密な連携と，一層しっかりした自活力を持つマネージメントを固める必要が大きくなっていくことでしょう．

その際，情報公開，交流を欠かすことはできず，勢い電子情報に偏りがちとなることがあるでしょう．が，むしろ並立してハンズ・オンの方策を積極的に取り入れ，手で触れ，人と向き合い，野外に出て五感を活用することも決して忘れてはならないことでしょう．

博物館には，最近の中国でのように「原色図鑑」という媒体がやはり有効です．ただ注意しなければならない点は「エンサイクロペディズム」のみに偏向した旧来の“定方位”型が主体になるのではなく，自然誌であれば，それを取り巻く環境によく配慮されたエコ・モノグラフ的な存在を求めていくべき方向性が見えてきます．そして，それらを電子媒体としても活用できるよう心掛けるべきでしょう．

科学，あるいは科学技術，さらに自然誌をどのように理解するか，あるいは人文・社会・芸術関連の博物館的アイテムをいかに人との接点において捉えるかも大きな問題です．そうして，それらをどのようにポピュラライズさせるか，学芸員や友の会の人達の持つ課題や使命は決して小さくはない筈です．

まさに，ここにおいて21世紀の入り口に立ち，ニューミレニアムでの公共性と公益性とが大きく問われることになるのです．それには“物”と“金”のパワーが大事であることは否めませんが，何にもまして“人”と“その人の考え方”が最重要視されることになるでしょう．地域社会とグローバリズムの発揮を目標と定め，バリアフリーからユニバーサルへ，というムーブメントの流れを創り出すことが何よりも大切だからです．遠い未来へ向けて大きな目標を持ち，かつそれを恒久的課題に位置づけることも忘れてはならない，と信じています．

註記：濱田による本邦文報告を，それぞれ，中国の李大健氏ほかにより英訳，中国代表者ほかにより中訳し，次頁以降に集録させて頂いた．ここに特記して，翻訳の労をとられた皆様に，深く感謝いたします．（濱田記）

PRESENT CONDITIONS AND 21ST CENTURY PROSPECTS FOR MUSEUMS IN JAPAN

Dr. Takashi HAMADA

Director of Japan Science Society;
Director of Fukui Prefectural Dinosaur Museum;
Professor Emeritus, Tokyo University

ABSTRACT

2004 is the International Year of Museum. In this coming October, a convention will be held in the Republic of Korea. The theme for the convention is "intangible cultural assets and museums." Catchword for 2004 is "Museum Friend." MFJ (M. F. Japan) held a conference last year.

In Japan, museums (including zoos, botanical gardens and aquariums) have been regarded as a culture imposed from the Western nations. "Catch up with and overtake" manner therefore was taken for a long time in Japan. After the World War Ⅱ, however, the concept has been rapidly changing from "barrier-free orientation" to "universal-design orientation" along with the gradually-growing globalization in Japan society. At the present, there are 6000 museums in Japan, approximately 3000 of which are registered ones. The origin of museums is, needless to say, the international exposition. The dinosauria in the Crystal Palace still exists nowadays in the city of London.

In Japan, the venues for the expected International Exposition in Aichi prefecture are under construction in a steady manner. The centerpiece of the exposition will be "frozen mammoth" to be excavated and brought to the venues. In Makuhari Messe there is an exposition plan for bringing giant dinosaur fossils from China. Those activities fall absolutely within the range of "museum activities."

Museums in Japan have been conventionally designed for outdoor exhibitions. These days, however, in addition to the conventional exhibition style, they have introduced the "hands-on" exhibition style to flatter the senses of visitors. The interactive exhibits attract more and more visitors. Furthermore, lots of excavation works for archaeological, historical and paleotontological finding are actively carried out.

In respect of social circumstances, government-led "special wards for reform" including educational reforms get increased attention. In a matter of time, government-established and private-managed companies will replace government agencies. In the long run, private companies will lead the "special wards for reform." The special wards for reform are established mainly to demonstrate characteristics of the region, information disclosure to the region and relaxation of regulations in effect in the region. Those tendencies seem to expand to affect museum activities.

The existing "museums" in Japan are roughly grouped into three social levels in terms of their operating bodies, i.e., national level, municipality level such as prefectural level and private enterprise level.

As a whole, national or municipal museums are increasingly turned to independent administrative corporations. In the 21st century, they are expected to be developed to "general" museums emulating management methods employed by private museums.

I would like to begin by extending my warmest greetings to all of the participating directors at 2004 Beijing International Forum of Museum Directors.

As you know, 2004 has been designated the International Year of the Museum, and general conference is set to begin this October in Seoul. As the present 2004 Beijing International Forum of Museum Directors serves as a sort of overture to the Seoul meeting, I am honored to have this opportunity to deliver this message to you in person.

The catch phrase for the International Year of the Museum is "Museum Friends." A year ago, in preparation for this auspicious year, Japan launched Museum Friends Japan, or MFJ.

The tradition of the museum as we know it today has its origin in Europe, and specifically in London, where the first World Fair was held in 1851. There a public exhibition of dinosaur remains was presented at the Crystal Palace, a pavilion at that time.

Despite its twists and turns, the modernization of natural history in the era after the World War Ⅱ deserves close attention. In Asia, which for our purposes means India, China and the areas in their cultural spheres, culture is deeply rooted in religion and traditional Chinese medicine. If we equate "modernization" with "westernization," this was the era of the emergence of true museums in Asia.

In Japan, the roots of the museum can be traced back to the Meiji enlightenment, when aspects of "imported culture" such as university and museum systems were set in place. Shifting ahead to the modern postwar era, Japan's astonishing recovery and economic reconstruction formed the backdrop for an awakening of interest in Western culture. Numerous employees were recruited from overseas, and exchange students were sent abroad from Japan, as the nation struggled to catch up to, and where possible overtake, foreign nations.

Without getting into too much detail, we can move forward again to the present day, when the movements toward barrier-free and universal access precipitated a surprisingly rapid transformation in the museum movements. Today some 6,000 museums and similar facilities are in operation in Japan, only half of which are registered members of the Japanese Association of Museums. For the Association, this means we can expect to continue to grow significantly.

I would like to take a brief, bird's-eye view of Japan's museums and similar institutions-which include zoos, botanical gardens, aquariums and science museums, as well as nature and scenic preserves from the national and state-sponsored levels to the local-government level, and a wide range of cultural treasures such as famous and historic locations, shrines, temples and gardens. I will then touch on the differences between such institutions in Japan and those elsewhere, particularly in China.

Much of Japan's natural and cultural heritage is the product of its unusual geography. An archipelago surrounded by ocean, Japan's climates range from sub arctic to tropical, in a string of islands 2,000km north to south. Two major currents wash its shores: the Kuroshio, a warm current from the south, and the Oyashio, a cold current from the north. These factors contribute to a rich and complex fauna. The geology of Japan is also complex, with spots of great beauty both famous and unknown. On another level, Japan's cultural heritage is informed by a rich legacy of historical structures and intangible treasures.

Of course, China's history is far longer than Japan's and its ethnographical diversity is much more pronounced. The natural and cultural legacy of China's vast landscape and mighty rivers is frequently emphasized. For example, the "uniqueness" of China's geography is strongly underscored at the Agricultural Museum in Beijing.

Japan boasts a wealth of cultural institutions that focus attention on the interaction between mountainous and alluvial regions as they occur at shorelines, rivers and wetlands. Their exhibits reflect not only local conditions but topography in a global context as well.

Another salient feature of Japan's museum culture is the exceptional abundance of public-spirited museums and similar institutions are financially independent. Recent years have seen an explosion of unusual museums, such as food museums, street museums and even museums without formal premises. These small-scale museums, which include "beach museums" and "river museums," represent a breed of self-styled museums that are small in scale and broad in scope.

It is a shame that this wonderful flowering of museums, scenic places and historical sites is stymied by a failure to convey their message to the public. Aside from tourist brochures, a few newspaper advertisements and some ads in train stations, little is done to raise public awareness of this precious resource. We can only envy the abundance of brochures and guidebooks of public parks and museums that one sees everywhere at port and airport lobbies in other countries. Every setting aside the obvious language difficulties for people visiting Japan from overseas, the absence of effective public relations must make Japan seem an impoverished country indeed in terms of museums.

Recently the number of museum visitors in Japan has begun to rise. This is partly because people are increasingly traveling by car, but it also reflects some daring on the part of museum curators. For example, several prefectures in the Hokuriku region, on the Sea of Japan coast, have joined together to create a "Kingdom of the Dinosaurs" and a "Dinosaur Highway," mindful that campaigns such as these not only attract visitors to museums but drive sales of souvenirs and the like as well. This is clearly an important and positive trend.

On the other hand, in neighboring countries such as South Korea and China (including Taiwan), there is a clear dearth of children's museums. These are likely to increase in number, as they already have in Japan and the United States. As you all recognize, the mission of a museum is not just to do research but to enlighten the public in an enjoyable setting, conveying knowledge in a readily understandable way to local communities. I believe that the fields of archeology, paleo-anthropology and paleontology offer rich opportunities for collaboration among China, Japan and South Korea, which share thousands of years of interlinked history. Linked exhibitions of dinosaur fossils may be one fruitful area to explore.

I 'd like to turn now to a report on some development in Japan.

In a very short space of time, dinosaur fossils have been found in 15 of Japan's 46 prefectures. The first of these is the leg bone of "Moshiryu," obtained from marine deposits (conglomerate stone) in Iwate Prefecture in 1978. Moshiryu is believed to be

a specimen of *Mamenchisaurus*, a sauropod previously found in China. Since then, dinosaur fossils have been reported in every part of Japan, causing dinosaur museums to spring up throughout the nation, centered on these precious finds.

The greatest find of all, however, was a cache of over 2,000 dinosaur fossils in and around Katsuyama in Fukui Prefecture. This trouve now forms the basis for the growth and development of the Fukui Prefectural Dinosaur Museum. For the past ten years, a steady stream of undergraduate and graduate students has been visiting the Museum to conduct preliminary surveys and the like, as part of Museum's efforts to train a new generation of dinosaurologists.

In the early days of Japanese paleontology, had no experts of its own to lead an appropriate training program in dinosaurology. Fortunately we had a great deal of help from overseas, and especially from Prof. Dong Zhiming（董枝明）of the Chinese Academy of Sciences in Beijing.

In Fukui as well as other regions, rich dinosaur fossil beds of great diversity have been found in the freshwater sedimentary layers of the early Cretaceous period, as well as the contrasting Tetori series. Moreover attendant fossils offer detailed information about the environment of that era, with remains of shellfish as well as the plants and other organisms on which they fed. In addition to dinosaur skeletons, teeth, eggshells, footprints and even skin have been discovered. Remains of fauna other than dinosaurs include birds, pterosaurs, insects, fish, amphibians, reptiles such as turtles and alligators, and primeval mammals, testifying to the enormous diversity of the environment. It is with dinosaur fossils that research efforts are most preoccupied, however, so great things in the study of these attendant fossils are still to come.

The Tetori series is distributed through the center of Japan, on the Sea of Japan coast. Surveys of the sedimentary deposits themselves indicate that the region was bordered by a hinterland of rivers with their origins on the Chinese mainland, when the Sea of Japan did not yet exist. It is thought that this region should be rich in alluvial deposits. Although little is yet known, it would not be surprising to find dinosaurs with feathers or birds with feathers and teeth, as is the case in China.

Fossil beds containing dinosaurs with feathers, as well as primeval birds that contrast with the archaeopteryx era in Germany, have been found in Liaoning Province, China, and yielded some 2,000 specimens. These finds pose some challenging questions for taxonomy, portending the strong possibility of some truly outstanding results from China in the near future. For example, it appears that dinosaurs, which have been classed as reptiles, are the only creatures other than birds to have developed eggs with hard shells. Although the analysis of this extraordinary apparent commonality is not yet complete, it presents a tantalizing indication of the extent to which a stronger international research framework may well revolutionize taxonomy in the near future.

In Japan, dinosaur exhibits and exhibitions are everywhere. No doubt this is in large part due to a global surge in the popularity of dinosaurs; indeed the phenomenon is worthy of special mention on its own. These exhibits are a central issue at the Fukui Prefectural Dinosaur Museum. Under an international cooperative framework, they are expected to boost intellectual curiosity in the topic throughout Asia.

I would now like to turn to the topic of the relationship between conditions in Japanese society and their relationship with museum and museum activities in Japan.

Japan is in the midst of sweeping social and economic changes, focusing on the "special zones for structural reform" mooted in 2003. These areas are extremely broad in scope but cover three core domains: government-established, privately run operations; decentralization and deregulation; and generating idea from the grass roots.

The first of the change advocated in the 2003 plan was a call for over 1000 proposals from local government; in the event, more than 230 proposals were admitted. Special zones in economics and agriculture were suggested, and the idea of "mixed" areas, such as the Doburoku, crude home-brewed sake, special zone, attracted special attention. In special areas of education, a systematic overhaul of the present educational curriculum was advocated. One aim of this overhaul was to enable text to break down the barriers to students with learning disabilities. In each case, the general thrust was to move away from management by central ministry in government-established, privately run operations, in favor of greater decision-making latitude on the part of local governments.

Many dangers in the current educational system remain unresolved. For example, how much power do Boards of Education hold at the local-government level? How do we approach the Law on the Standards for Establishment of Private School? What is the role of museums?

At this point, museum and their activities are not necessarily related to these special areas. The result may be the extension of the activities of volunteer group such as "Museum Friends" to community school and museum schools as permanent areas of activity.

In closing, allow me to offer some details on forecasts and future direction for museum activities in Japan and related social aspects.

With its dense population, paucity of viable land and lack of natural resources, Japan is determined to solve the wide range of environmental issues that confront the world today. In the interests of conservation, it is undesirable to place a single museum in the middle of a wide area. Rather, the development of museum parks, in which a parcel of land is shared among a number of museums, makes more efficient use of land while encouraging closer collaboration among institutions. Encouraging greater independence in the management of museum activities would also enable museums to use their resources more efficiently.

In so doing, the publication and sharing of information are

essential. Although there is a tendency to rely on electronic media for this purpose, it is also vital to take a proactive, hands-on approach to communication. People should be encouraged to touch exhibits with their hands, interact with other people, and experience the outdoors with their senses.

In China, museums have found media such as "primary color picture book" to be especially helpful. However, in this vein it is important to break away from the conventional tendency toward publications that read like encyclopedias. Nature magazines, for example, increasingly include ecological monographs and other content that duly considers the environment in which they operate. More effort toward electronic distribution of such publications would be fruitful.

A core issue for museums is how the public understand science, technology and journals such as nature magazines, and how to use museum artifacts relating to the humanities, society and fine arts as a contact point between museums and the public. Determining how to popularize these matters is another thorny issue. These are critical tasks for curatorial staff and museum friends alike.

The turn of a new millennium is an appropriate time to assess how museums can serve the public interest going forward. Although the availability of materials and financial resources is undeniably crucial, our most important resource is our people and their creativity. Because the needs of local communities and globalism are such important measures of a museum's relevance, museum must respond proactively to the movement toward barrier-free, universal access. Today's museums must distant, long-term goals and work implacably toward their fruition.

“日本的博物馆概况与21世纪展望”

濱田隆士

（财）日本科学协会理事长、福井县立恐龙博物馆馆长、东京大学名誉教授

以CRSM的Li HueGe先生为首的参加2004年北京国际博物馆论坛的各位馆长先生们，大家好！

众所周知，今年是国际博物馆年，今年10月份将在韩国召开国际博物馆年会，此次北京中国博物馆博览会可以说是其前哨战．今天有幸在此与大家进行交流，我感到非常荣幸．

今年国际博物馆年的主题是“博物馆与朋友（Museum Friends）”，在这里请允许我向大家介绍，我国在1年前的2003年也提出了MFJ——Museum Friends, Japan（博物馆与朋友，日本）的口号．

放眼世界博物馆行业，其发祥地在欧洲，在伦敦召开的第一次万国博览会（1851）上，曾推出了模仿恐龙的大型“水晶宫”，至今仍被保留当作纪念．

第二次世界大战后，博物馆学虽经历了一些波折，但其现代化历程仍不免让人叹为观止．虽有不同的定义，但在亚洲（印度－中国）可以说是深深扎根与宗教和中医学的文化．如果将西欧化理解为现代化，那么博物馆学时至今日，可以说终于具备了高水平博物馆之架构．

回顾博物馆在日本的发展历程，作为“引进文化”的大学制度和博物馆制度在明治开化期才开始建立．战后的“复兴”期和“经济重建”期有显著发展，通过学习西方文化，邀请众多外国雇员以及派留学生到国外学习等举措，为提高“赶追、赶超风气”而努力．

详细的情况不在这里进行介绍．近年从“无障碍设计”到“万能设计”的思想过度，其转变的速度之快确实令人惊讶．日本目前有6000所博物馆或类似博物馆的设施，但在日本博物馆协会登记注册的为数不过半数，这使我们期待今后的更大发展．

下面，请让我简单介绍一下日本的博物馆概况，范围包括动植物园，水族馆，科学馆，以及由各地方政府管辖的国立和国家指定公园等自然景观保护区和名胜古迹，还有神社，寺院，庭园等多种自然文化遗产．通过将其与海外—主要是中国的博物馆之特色进行比较，希望能够使大家清楚地认识其不同特点．

日本国土四面临海，是南北跨越2000km的列岛，气候呈现从亚寒带到热带的特点．沿着海岸线，大海从南面带来暖流“Kuroshio”，从北面带来寒流“Oyashio”．以此为基础形成的植被和地质构造也相当复杂，到处都是名胜，奇景，文化方面也包括很多历史建筑和各种无形文化财产．各个领域的对外展览和展示采用的是庭园式及博物馆方式，因此拥有包罗万象的文化公益设施，而这与人口的密度与文化程度是密不可分的．

在历史的久远和民族的多样性方面日本是无法与中国比拟的，广阔的国土与壮丽的河川所带来的自然文化遗产，需要一个如同位于北京的农业博物馆这样能突出其特性的载体，才能引人注目．

日本富有与海滨，河川，湖泊，沼泽等密切相关的各种文化设施，它们着眼于山岳森林和水域之相互作用，既反映了国情，也反映了以开阔的视野眺望的地势．

日本的另一大特点，就是拥有为数众多的以各种企业，组合，个人为单位的公共性很高的博物馆及类似设施．它们与国立和公立博物馆不同，全部独立经营，自负盈亏．尤其是近年来，以街角博物馆为首的食物博物馆，以及不受建筑物局限的（即不需要用建筑框起来的）沙滩博物馆或江湾博物馆等非常“小规模”且“综合性”的“自我命名博物馆”等陆续诞生，且发展迅速．

不过因为各种博物馆和名胜古迹太多，有关它们的信息难以传播，只有在观光小册子，报纸的折叠广告以及火车站等极其有限的范围内才能看到．所以每当在机场和港湾候机室看到外国公园，博物馆的导游册子，都着实让我羡慕．除此之外，访问日本的外国客人还面临语言的障碍，对此作为日本人也感到很遗憾．

近来日本的博物馆参观人数有所增加也许是汽车社会的反映吧，这也大大地增强了我们的信心．例如，日本海的北陆各县以恐龙王国命名，展开恐龙街道等宣传活动，虽然是吸引观光客的手段之一，但也会带动相关产业的发展，因此是值得重视的动向．

另一方面，我们的邻国—韩国和中国（包括台湾），的确缺少儿童博物馆，今后我想也会象美国，日本一样呈现增加的趋势．博物馆是从事调查，研究的场所，这一点不必多说，但它更是激发人们的“闲情逸致”，以及使地区居民即市民体会“通俗易懂”的场所．在这一点上，既然中，韩两国都在悠久的历史长河中与日本有着不浅的渊源，那么我们希望两国在恐龙化石方面，或考古，古人类学方面取得更大更快的发展．

下面请让我对日本的实际研究情况作一个介绍.

关于日本值得一提的事，应该是恐龙化石在转瞬间传播到46 个都道府县中的 14 个道县一事. 岩手县第一个从海底沉积地层中发现了被称之为茂师龙的，被认为是Mamenchisaurus（马门溪龙）的腿骨. 这是 1978 年的事. 此后日本各地相继发现恐龙化石，每次都极受重视，各地以这些“宝物”为中心，争相建设恐龙博物馆.

最具代表性的当数福井县胜山市及其附近发现的共计 2000 个以上的恐龙骨化石，它为福井县恐龙博物馆的发展奠定了基础. 发掘工作从调查准备阶段到完成历时 10 余年. 每年夏天都由大学生和研究生通过露营的方式参加，整个过程共有 3 届学生参与其中. 更值得一提的是，这一过程培养出了一批励志以研究恐龙为专业的人才.

当时的日本因为没有像今天这样的留学专家，所以只能由一批临时选拔的“恐龙研究人员”独当一面. 当然我们也得到了很多来自国外的支持，尤其是来自北京中国科学院的董枝明先生给了我们很大的帮助.

除福井县外，我们在“手取统”地层或与其对应的中生代白垩纪前期的淡水沉积物中，也发现了多种多样的恐龙化石，以及显示当时古环境的多个随伴化石（贝类以及被推测为食物的植物和多种生物），这一切都使我们信心十足. 除了恐龙骨骼，我们还发现了牙齿，卵壳，足迹，皮肤痕等，而且分检出鸟类，翼龙，昆虫类，鱼类，龟，鳄鱼等爬虫类和原始哺乳类等构成当时多样化环境的生物群. 由于研究恐龙化石的工作繁忙，这些随伴化石的研究只能暂时搁置一旁.

“手取统”地层以接近日本列岛中部的日本海为中心分布，从其沉积物的调查中推测：在今天的日本海形成以前，以中国大陆为源头的河川成为连接陆地的河床，带来了许多沉积物. 真实情况虽未得到证实，但日本肯定也有类似在中国被发现的有毛恐龙及生有羽毛和牙齿的鸟类.

从中国辽宁省的有毛恐龙（对应德国始祖鸟时代）原始鸟类化石层发掘出的化石超过 2000 个，分类学上到底将其归为哪一类，将在很大程度上取决于今后中国的研究成果. 这是由于只有恐龙类（以前归为爬虫类）和鸟类有一个神奇的共性，就是都拥有硬壳卵，而对这一现象至今没有一个合理的解释. 我们相信今后随着国际研究体系的进一步完善，大分类学将会有一个全面的改观.

另一方面，日本国内开办的为数众多的有关恐龙的各种展示展览，与全球恐龙热不无关系，这一点尤其值得我们重视. 上面介绍的福井县立恐龙博物馆也经常将相关的中心课题提到议事日程上，今后在国际互助体系中，亚洲各国将更好地提高人们对于相关知识的好奇心.

下面，我想从博物馆活动的观点，展望日本国内的社会概况与博物馆类的相互关系.

近两年，我国的社会改革和经济改革的风潮日盛，其中“机构改革特别区域”制度从 2003 年开始实施. 即在“特区（省略语）”的事业区域内，在极其广泛的领域树立“官办 / 民营”，“地方分权 / 放宽规定”，“收集民意提出各项创意”等 3 大支柱.

2003 年的第一次认证收到了来自各地方政府的超过 1000 个提案，其中 230 余件“特区”申请获得批准. 其中包括经济特区和农业特区，甚至还包括浊酒特区，以“种类繁多”引人侧目. 其中，教育特区旨在从根本上重新审视和修订目前的教育课程，文部科学省为改善一直以来的弱势群体—“拒绝上学”的人群即 LD(学习困难)人士的处境，为其大开门户. 其宗旨在于，虽是官办 / 民营，却并非通过国家的中央政府，而是由各地方政府根据各自的能力给予支援.

问题是虽出于民意，却仍然有着被今天的教育制度牵着鼻子走的危险. 例如，现有的国立和公立教育委员会在各地方政府范围内，其权利能够行使到什么程度；怎样处理与私立学校设立基准法之间的关系；博物馆方面将走向何方等堆积如山的问题正等待我们去解决.

关于博物馆和博物馆活动，在现阶段并不一定要采取特区的形式. 但是，文部科学省正在就如何通过博物馆推进地方中小学之间的联合活动问题，研究和拟定多种方案，最终也许会以永久性活动的形式，例如博物馆友之会，志愿者联合会型的“自由集团”，社区学校，博物馆学校等来达到特区性的活动效果.

最后，我想就上面所谈到的在日博物馆以及围绕它的社会层面—博物馆型活动之设想及预测进行总结.

我国人口密度高，土地狭窄，资源匮乏，而且面临诸多不得不解决的环境问题. 在这样的大前提下，占用大片土地建设博物馆实在是一种奢望. 因此，采用博物馆公园形式，对多个博物馆进行集中管理，对于实现更紧密的合作并更好地发挥自主性及活力将大有裨益.

在上述情况下，公开信息和加强交流是必不可少的，这方面将更多借助于电子信息. 但与此同时，积极引进动手型方案和措施，使人们不要忘记用手触摸，与人面对面交往，去到野外充分动用自己感官的重要性.

对博物馆来说，最近在中国盛行的“原色图鉴”一类媒体还是有效的. 但有一点值得注意的是，不应把重点放在以前的偏向“百科全书”的“定位”，如果是博物学，应充分考虑其周围环境，朝着生态环境专论的方向发展. 同时不要忘记将这些专论做成电子媒体形式，方便人们使用.

了解科学，尤其是科学技术，进而了解博物学，以及如何把握博物馆中的人文，社会，艺术等相关要素与人的对接，都是重要命题. 同时，怎样使其内容广受欢迎，这些都是各位博物馆专业人员与博物馆之友的使命，真可谓任重而道远. 我们正站在 21 世纪的入口，新千年的公共性与公益性是摆在我们面前的大课题. 实现这一目标，“物力”与“财力”固然重要，但更重要的是“人”与“人之想法”. 以发挥地区社会和全球化之特色为目标，促进从无障碍设计到万能设计的转变比什么都重要. 我希望大家都拥有面向未来的长远眼光，并且勿忘将其作为永久的课题.

谢谢大家.